**会場** 出会いの場ポレポレ

昨年7月の久留米市豪雨災害、2024年1月の能登半島地震。毎年、全国各地で甚大な被害が出ている中で、私たちには備えが重要となってきます。その備えとは、備蓄だけではなく、発災時に知恵や力を出しあうために、日頃からの訓練や近隣での支え合いが基盤となります。

そこで、第23回の祭りでは、日常の中でできることを体験していただこうと、炊き出しなどの訓練の場や災害時の生活体験、防災グッズを身近に感じられる内容を盛り込み、日頃からの備えを意識できるような祭りとなるよう準備を進めています。

そして、今年も高校生や大学生、企業の皆さんと実行委員会を結成。たくさんの出会いが生まれ、子どもや障がい者、高齢者も参加しやすい祭りを創り上げると共に、防災を意識できるような祭りになるよう、準備の段階から多種多様な方々と一緒に取り組んでいきたいと思います。ご期待ください。

**2拠点に祭りの事務局を設置！**
ぷらっと.荘島（西部） & 御井あんだんて（東部）

ユニバーサルデザインに取り組みます　誰一人取り残さない

収益金は災害にそなえるための備品購入に使います。

**社会福祉法人拓く**　1970年代より久留米市で展開した障がい児の保護者と教員による統合教育運動が原点。2000年10月法人設立。障がいが重くても誰もが地域で暮らすために「コミュニティづくり」に取り組んでいます。

**事業所**　出会いの場ポレポレ・夢工房・グループホーム・ポレポレ居宅介護支援センター
出会いの場Leo・相談支援センターカリブ・久留米市西部障害者基幹相談支援センター

拓くウェブサイト QRコード　活動を更新中！

拓く通信
2024年6月号（年2回発行）
発行：社会福祉法人 拓く　法人本部　〒830-0071 福岡県久留米市安武町武島468-2　TEL 0942-27-2039

# 拓く通信

2024 6月号 No.22

CONTENTS

「隣人」として能登に駆け付けた…2・3
「夢工房」と「御井あんだんて」東部の拠点づくり……4・5
第22回ポレポレ祭り報告……6・7
第23回ポレポレ祭り告知……8

共に手をとり、共につくろう。新時代 その2

## 誰かの「もしも」に駆け付ける。そんなまちにしたい。

2024年1月31日、理事長は石川県輪島朝市通りに。甚大な被害の中、立ち尽くした。

理事長メッセージ12　社会福祉法人拓く　理事長　馬場　篤子

2024年元日早々、能登半島地震によって甚大な被害に。このように危険をはらんだ自然災害の頻発（もしも）が日常（いつも）になりつつあります。次いで、国民の5人に1人が後期高齢者となり、雇用や医療、福祉など社会に影響をもたらす「2025年問題」に突入。逆に社会保障制度の担い手である現役世代は負担増。この超高齢社会にそなえるには、地域コミュニティの活性化、近隣住民同士で交流する機会や場の積極的な設置、そして、みんなが「もしも」のときに駆け付けるような「隣人」になることが大切だと考えます。

当法人は2008年より、※久留米官民協働コンソーシアムを結成し、「小さな拠点づくり」「地域食堂」「被災地支援」「本業＋α」「そなえるくるめ」などで異業種異領域による掛け合わせを駆使し、共助の力を育ててきました。この積み重ねをもとに能登半島地震の一報を受けて、災害支援の仲間の輪を広げようと同コンソーシアムのLINEを活用し、100名ほどに情報発信。また、1月11日を皮切りに2月と3月、職員は「隣人」として被災地に駆け付けました。

そして、私たちのまちでも「隣人」意識を高めていきたい。まず、久留米市の東部、御井町にあるグループホーム「御井あんだんて」の改造・増築。「地域食堂」運営やカレー会などの交流活動を活発化し、近所の久留米大学とも連携、「防災」の拠点としての役割も担っていきます。次に、毎秋実施の「ポレポレ祭り」。長年、様々なテーマのもと、今では500人以上のボランティアと400団体の協賛を得て開催、0歳から100歳までの方々や多くの障がい者が参画し、多様な出会いが生まれる場所に。まちづくりのプラットフォームのひとつとして定着しています。今秋は、「誰もが被災地に駆け付ける」という視点で、炊出しや物資運びの技能を学ぶワークショップの場も設ける予定です。

誰かの「もしも」のときに駆け付ける。私たちひとりひとりが普段からそのような「隣人」の意識をもち、行動できたら、さらに高まる自然災害リスクがあろうと、どんなにか心強いでしょう。「久留米の人は、誰かの『もしも』に駆け付ける」、そんな「隣人のまち」にしたいと願っています。

※官民の多様なメンバーで構成。社会的活動の推進を目的に研修や実践を重ねる。LINE登録者は140人。

# 「隣人」として、能登に駆け付けた。「支援力」を学んだ。

2024年1月1日、能登半島地震が発生。
当法人は1月11日より2月と3月、7名の職員が石川県珠洲市で支援活動を。
今回、被災者のために、そして支援者を受け入れるために奔走する、
「隣人」意識の高い方々に出会い、その「支援力」を学んだ。

**1月～3月、石川県珠洲市での支援活動。**
**職員の活動を報告します。**

## 普段の実践の中で「支援力」を培っていきたい

社会福祉法人拓く　課長　**小川　真太朗**

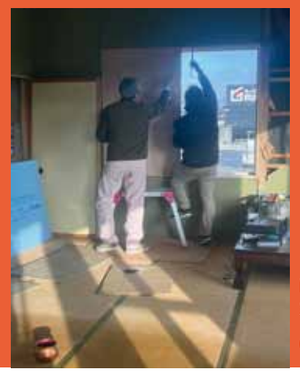
地震発生直後、現地の受け入れ態勢が整っていない状況では、支援者は何ができるのか、不安が募ります。しかし、「できることがあるかもしれない」という思いで、実際に被災地へ駆け付ける「隣人」がいます。私もその仲間に加わりたいと気持ちが高まる中、1月11日に久留米を出発。「NPO法人暮らしづくりネットワーク北芝」の池谷さん（大阪府）の車に金沢市で同乗して石川県珠洲市へ。支援者は、日本海側の冬の厳しさや豪雪、悪路、土地勘のなさなどで様々な課題と向き合うことになります。池谷さんは彼らからの電話に始終追われ、「いつでもお電話ください。すぐに出ます」と。支援者を受け入れて活動に集中できるようにと、不安をひとつひとつ解決しておられました。

12日、珠洲市入り。支援拠点となったスズ交通（株）の2階は地震で窓や天井が崩れ落ちた事態でした。池谷さんと私は「NPO法人YNF」代表の江崎さん（福岡県）と共に雨風を凌ぐための補修や支援物資の搬入・整理などを。それらを迅速にこなしていくお二人の対応力、そして、被災者と支援者に「隣人」として誠心誠意接する姿にただただ驚きました。

1月20日、久留米からランドクルーザーで出発。21日、石川県珠洲市に到着。小川（右・2回目の現地入り）と原田（左）。

福祉事業所に16年間勤務し、現在は管理者として職務に携わっている私ですが、今回の支援活動を通して育っていない力があると気づきました。行政や多団体と協働する。すぐにレスポンス（対応）し、発信する。多様な支援者を巻き込んで、災害支援の隙間を埋めていく。そして誰一人残さない支援をしようと心がける。この「支援力」は、きっと普段の仕事や暮らしの中で培っていくもの。障がい者や被災者が必要としていることに徹底して寄り添い、解決できるように日々の実践の中で力をつけていきたいと思います。

### 1月



1月12日、小川が珠洲市に到着。雨風を凌ぐためにスピーディーに窓を補修する。

(左)池谷さん　(右)江崎さん

物資をすぐに届けられるように搬入・整理

珠洲市の温泉施設「海浜あみだ湯」が再開。1月23日、風呂掃除などのサポートに入る。毎日600人以上の被災者が入浴する。

### 「受援」と「事業継続」の体制づくりをBCP計画に。

社会福祉法人拓く　本部長
**浦川　直人**

発災後は一気に数百の支援の申し出が寄せられ、大量の支援物資も届きます。それを受け入れる場所、運ぶ人、運ぶ車、そしてコーディネートする人、つまり、「受援する体制」。それがすぐに起動できることが重要です。障がい福祉施設（珠洲市）の理事長のお話では、「発災からライフライン復旧までは何とかなったが、本当に厳しいのは今から。珠洲市から離れた職員と利用者が戻ってくるあてもない状況では事業継続の見通しが立たない」と。福祉の維持のためにも、まちの現役世代の産業・雇用の維持・創出などが大きな課題だと感じます。「受援」と「事業継続」の2点をBCP計画（事業継続計画）に盛り込み、実効性のある計画を策定していきたいと思います。

### 被災直後、衣食住にいち早く代替の支援を。

久留米市西部障害者基幹相談支援センター
**原田　郁大**

被災直後は食の質が大きく低下し洗濯もできず、厳寒の中、入浴もできない。そのストレスと疲れは相当なものです。いち早く代替となる支援、例えば無料の「炊き出し」や「入浴支援」、下着やタオル、石けん等の配布支援の重要性を感じました。自然災害や人為災害、私たちはその危険と隣り合わせなのかもしれません。老いや病気のようにいつか起こるもの、という考えの下、日頃から意識して過ごす必要があると改めて気づきました。

### 知恵や情報を集め、「ちょっとした支援」で前進できる

グループホーム「御井あんだんて」　世話人
**森田　さかえ・渡邉　智香**

自衛隊の仮設風呂は疲れた体を癒してくれますが、高齢者・障がい者の使用は想定されておらず、入りにくいと聞いていました。ところが、自衛隊風呂の中には「おひとり様風呂」と名づけ、入浴者の見守りなどの支援を行っている方々が。一人一人に寄り添うようなきめ細やかな姿勢を実践されている様子に感銘を受け、現場での気づきによって、自分に何ができるかを考えさせられる場面でした。例えば、今ある介護用品を持ち込むなど、ちょっとした工夫で高齢者も障がい者も入浴しやすい風呂に。みんなの知恵や情報を集めての「ちょっとした支援」で、大切な、そして大きな支援に変わっていく。すると、暮らしやすさが生まれ、被災者の方々が前に進もうとする力になっていることを感じ、福祉職に携わる私たちにこそできる支援があると実感しました。

### 3月

仮設のトレーラーハウスが珠洲市全戸訪問調査の事務所。日々のデータ入力・分析を行った。

水が出ない中、「道の駅」で炊き出しの支援。「久しぶりの野菜、おいしかった」と被災者。

浦川（写真右端・3月8日～）、森田と渡邉（2月24日～）が現地へ。全国から駆け付けたボランティアと珠洲市社会福祉協議会の方とペアになって訪問調査を行った。

第22回 ポレポレ祭り報告

# 「共に手をとり、共につくろう。新時代」駆け付けてくださる「仲間」と祭りを創り上げる。

2023年11月5日、第２２回ポレポレ祭りは、コロナ禍以来、４年ぶりに通常の規模で開催。
実行委員会には、高校生や大学生、障がい当事者も加わり、誰もが参加しやすい祭りを創り出した。
そして今、第２３回ポレポレ祭りへ始動！

ステージと会場の皆さんは歌って、踊って、楽しんだ。混ざり合いながら盛り上がり。

## ポレポレ祭りは、プラットフォームとして多くの人をつなぐ。

社会福祉法人拓く　統括本部長　**北岡　さとみ**

第２２回ポレポレ祭りは、４年ぶりに安武町にある出会いの場ポレポレにて通常開催。そのテーマは、「共に手をとり、共につくろう。新時代」でした。コロナ禍の影響で学校に行けなかった高校生。新しく出会った友達の素顔は知らず、マスクをしたまま距離をとりながら過ごしてきた３年間を振り返る中で、人恋しさを感じ、つながりあうことの大切さや前を向いて生きていこうという、まさに私たちのこれからにとって必要なテーマでした。当日は、11月にもかかわらず気温28度という炎天下、ボランティア総数560名、出演者数160名が集結し、26店舗での販売や様々なイベントで会場は熱気に包まれました。

ポレポレ祭りには22年の歴史があり、毎回新たな出会いが生まれます。毎年参加してくださるベテランボランティアも多く、新人職員がボランティアの先輩に祭り運営のノウハウを学ぶ場にも。また、「ポレポレ祭りがあるよ。今年も手伝ってね」と声をかけると「わかった！いいよ」と二つ返事、仲間として駆け付けてくださっているのだと感じます。「ポレポレ祭り」というキーワードの下、プラットフォームとして多くの人をつなぎ、準備から当日までの時間を共に過ごすうちに、大変な中にも達成感や感動が生まれていると思います。

そして、2024年11月に開催予定の第23回ポレポレ祭り。自然災害が日常となりつつある今、これからの私たちが備えるべきテーマに取り組みます。自然災害を経験された方々とつながる場や防災体験ができる場を設けて、日頃からの備えを学ぶことで、いざというときに「隣人」として駆け付ける意識を皆さんと一緒に高めていきたいと思います。

前日は会場装飾。当日は子どもブース＆飲み物販売。そして次の日は片付けも。

今年の活躍も楽しみ！

## 2024年11月３日開催！第23回ポレポレ祭りの「視点」―「隣人意識」へ。普段からアンテナを張り、誰一人、取り残さない。

第22回ポレポレ祭り　事務局
第23回ポレポレ祭り　実行委員長　**溝尻　博子**

第２２回ポレポレ祭りでは、出会いの場Leoに併設する「ぷらっと.荘島」が祭りの事務局となり、私もその理事として業務につきました。同祭は各団体、個人が協賛金や広告費を出したり集めたり、ボランティアが準備から片付けまで参画、バザー出店の団体は売上の全額を寄付し、その収益金を地域社会に還元しています。このような視点をもつ祭りに、皆さんは我が事のようにして駆け付けてこられます。当日は、初めて出会う皆さんも「隣人」のような気持ちになって祭りを盛り上げ、成就感を味わえる点もこの祭りの醍醐味です。

そして、毎年掲げているテーマは、様々な社会的課題（環境問題や減災・防災等）に絞り、かつ、子どもや高齢の方、障がいをもつ方々が参画できること。そのためにはどんな事にもアンテナを張り、誰一人取り残さないように普段から意識することが大事で、このような「隣人意識」は誰もが当たり前に身に付けておくべき力であり、今こそ求められていると実感しました。２０２４年11月開催の第２３回ポレポレ祭りでは、実行委員長としてこの視点をもち、自分達の地域にいつ起きてもおかしくない出来事を想像しながら、前を向いて生活する術を身に付けることの大切さを発信していきたいと思います。

子どもから大人まで沢山の方が参加され、楽しみながら学ぶ場となった。

机、椅子200脚、テント20張りを学校から借用。前日にボランティアさんと搬入。

皆さん活き活きとした表情で、笑顔いっぱい。

### ■第22回 ポレポレ祭り　収支決算報告

| 収入の部 | |
|---|---|
| 項　目 | 金　額 |
| 広告・協賛 | 2,772,452 |
| 売上 | 2,343,071 |
| その他 | 166,945 |
| 収入合計① | 5,282,468 |

| 支出の部 | | | |
|---|---|---|---|
| 項　目 | 金　額 | 項　目 | 金　額 |
| 消耗品 | 428,796 | バザー材料・仕入費 | 1,137,997 |
| 設備費・警備費 | 616,220 | その他 | 732,302 |
| 通信・印刷・パンフレット代 | 441,542 | 支出合計 ② | 3,956,857 |
| 業務委託費 | 600,000 | 収支差額（①-②） | 1,325,611 |

### ■第21回 及び 第22回 ポレポレ祭り　収益金の使途について「そなえるくるめプロジェクト」と協働へ。防災に役立ててまいります。

| ポレポレ祭り | 益　金 |
|---|---|
| 第２１回 | 911,688円 |
| 第２２回 | 1,325,611円 |
| 合　計 | 2,237,299円 |

祭りの収益金については、毎回社会情勢に応じて検討し、災害支援や社会活動として活用させていただいています。資金面において、多くの企業や個人の皆様から多大なるご協力をいただくことができるようになりました。

第21回（911,688円）と第22回（1,325,611円）におけるポレポレ祭りの収益金、その合計2,237,299円は、共用防災備蓄倉庫の設置と災害対応簡易折りたたみベッドの購入に使用させていただきます。この取り組みは、久留米官民協働防災ネットワーク「そなえるくるめプロジェクト」として始動し、各地域に備蓄倉庫を設置する予定です。津福本町に活動拠点を設置するために、久留米市、民間団体、企業、近隣校区の皆様と打ち合わせ中です。次号の「拓く通信」にてお知らせいたします。

**つむぎの会主催「つどいの会」**（2019年）
誰もが孤独にならないように、学齢の子どもや保護者、地域の方々をあえて集めて、ピザ会やそうめん流し、お泊り会などで関係性をつくっていった。

「夢工房」と「御井あんだんて」　東部の拠点づくり①

# 「グループホーム開き」を実践。「隣人意識」を育てる拠点へ、再出発。

2010年に開設したグループホーム「御井あんだんて」は、地域みんなの居場所にしたい。14年目の今、「隣人意識」を新しいコミュニティの設立時から地域に開こうと、「グループホーム開き」を実践。災害支援・復興の拠点にしたい。育てる拠点として改築に着手。あり方に挑んでいきたい。

夢工房　管理者　野上　真紀子

## 庭の清掃・草取り

「御井あんだんて」に住む仲間たちに庭歩きや食事等を楽しんでもらいたい。その思いで、夢工房の利用者とスタッフは伐採や草取りをしたり、伐根された切り株を運んだりと植木屋さんのような大仕事を。今後、庭のリノベーションを夢工房の利用者の仕事にできないかとの将来的な展望も開けてきた。

まず保護者らが庭作業に着手。「御井あんだんて」は、広い敷地に庭付き、瓦屋根木造2階建ての昔ながらの民家（築50年）をリフォームしてスタートした。

## 障がい者が地域の人をつなぐ

1987年、久留米市の東部に位置する御井町に、「どんなに障がいが重くても、地域の中で当たり前に学び、暮らす」という理念のもと、久留米養護学校（当時）の教員や有志市民による運動で共同作業所「夢工房」が開所されました。毎年、1000人規模の「夢気球コンサート」を開催しながら、「愛」「平和」そして「共生」を謳っての活動。2007年、当法人は夢工房と合併し、2年後に開店した「FOODS CAFÉ YUME」には近隣の大学生や高校生、地域の人たちが来店し、スタッフを務める障がい者が生き生きと自信を持って働き、カフェの要となって地域の人をつないでいきました。しかし、大勢の人と出会う場を創り出し、利用者やスタッフはやりがいを得たものの、「地域の共助力を育てる」という目的に至らず、隣人意識を培うには多様な仕掛けが必要という課題を痛感しました。

## 「隣人意識」を根づかせる

2010年、御井町にグループホーム「御井あんだんて（以下・あんだんて）」を開所。人権学習会に出席し、入居者と保護者が挨拶すると地域の人がこう問いました。

「私達に、どんなことができますか？」

「協力できることは何ですか？」

「あんだんて」は地域に迎え入れてもらえるかもしれない。スタッフと保護者は、障がい者と地域の人をつなごうと一歩踏み出し、グループホームの運営委員会を設置。メンバーは地域の自治会長や老人会の会長、ふれあい会長、大学生などです。毎月の話し合いを重ねての活動には、町内の皆さんもスタッフとして参画。日頃からご近所さんを意識し、その声に耳を傾けてきました。例えば月1回のカレー会は、「カレーを食べたい」と言うおばあちゃんの言葉から発案。季節の料理を教わりながらの食事会などを仕掛けて、「隣人意識」を根づかせる土壌を整えていきました。

## グループホームを地域に開いていこう

「あんだんて」の裏には広い庭があります。小さい家庭菜園も楽しめて、木々や花実で季節を感じることができますが、やはり雑草や虫に悩まされるのは事実です。先日、ボランティアの人や保護者、利用者、職員と共に一斉清掃を実施しました。初めて使う電動のこぎりに悪戦苦闘しているとボランティアの方がこつを伝授。にぎやかな草取りだったのでしょう。大家さんや隣家のおじさん方も顔を出され、普段は挨拶程度ですが、このときは世間話に花が咲きました。同じ目的に向かっての共同作業や一緒に食事をする時間などを設けることで、人と人の間には心が通い合い、つながりが生まれます。もともと、「あんだんて」は「ちょっと寄ってみたい」「会いに行きたい」と大勢の方々が集う場所。改めて、グループホームをもっと地域に開いていこう、「隣人意識」を育てる拠点として再出発したいと意を強くしました。

## 新たな仲間を迎えて東部の拠点に

コロナ禍の3年を経て、2023年より「あんだんて」は、幅広い年齢層の皆さんが訪れるようになり、少しずつ交流人口が増えています。ボランティア団体「つむぎの会」による「カレー会」の復活、週に1回の「つむぎ食堂」の開店、そして、夢工房の利用者や学齢児童の宿泊体験、ショートステイも始まりました。

2024年に入って改装に着手。そのデザインコンセプトは、若い皆さんが立ち寄りたいという雰囲気を醸（かも）し出すことです。学生の町に位置する「夢工房」と「あんだんて」、災害復興の拠点としてもしっかり機能していきたいと思います。そのためにも、多様な人たちが大勢集まれるように建物を新築し、駐車場の整備、さらには既存の建物のリノベーションに着手します。そして災害や生活、病気などで困っているときに駆け付けるような「隣人意識」を高めていきたいと考えています。

## 季節の料理づくり

「御井あんだんて」の台所と食卓はあまり広くないが、保護者や職員、地域の方々が混ざり合って季節料理に腕をふるう。御井町の名物料理「カマス寿司づくり」もみんなで満喫。幸せです。